

# 「ありがとう」と「すみません」

坂本 恵

## 1 はじめに

「ありがとう」は感謝で“Thank you”、「すみません」は陳謝で“I am sorry”などと言われる。英語の訳もそのようにつけられていることが多い。(ここでは「ありがとう」を「ありがとうございました」「ありがとう」などを代表するものとして扱う。これに対し、「すみません」はせいぜい「すまない」程度のバリエーションしかない。) そう思っている非日本語母語話者は、感謝すべき時になぜ「ありがとう」でなく「すみません」といわれるのか理解できないことになる。一般的に短いあいさつ言葉は他の言語でそれに相当するものをあげても、使い方が異なるために母語話者から見ると違和感のある使い方になってしまうことが多い。例えば、「こんにちは」と“Hello”は同じではない。夜使えるか、電話で使えるかなどの具体的な使い方を考えればわかるだろう。「ありがとう」と「すみません」もその意味で誤解の多いものである。

そもそも「ありがとう」に感謝、「すみません」に陳謝の用法があるというわけではない。それぞれ固有の独自の意味、用法を持ち、それが異なった場面で使われるということなのである。それではそれぞれの意味、用法はどのようなものであろうか。

## 2 「ありがとう」

「ありがとう」はある終結した相手の動作に対して、プラスの評価をしているということを示す、と考えるのが適当である。また、その動作は当然性の高いものであることが多い。当然性が高い、というのは、自分と相手との社会的な関係の中で相手の行った行動を、して当然のことと捉えることができるということである。例えば、学生が教員に授業に関することを質問して答えてもらった、子供が親から誕生日のプレゼントをもらった、等のことである。ものをもらった、教えを受けた、など、受けたことがはっきりしている場合はその、有形、無形のものを受け取ったお礼として使われる。ほめてもらった、祝ってもらった、招待さ

れた（という形での配慮）というような無形の好意に対しても使われる。「誕生日おめでとうございます」に対しては「ありがとうございます」が適当である。「新年おめでとうございます」はお互いに祝い表現であって、相手の何らかの祝い事に対する配慮からのものではないため、この返事としては「ありがとうございます」は適当ではなく、相手と同様「おめでとうございます」で受けることになる。また、「一度家に遊びに来てください」に対して丁寧に応じたければ、「ありがとうございます」が適当であろう。この「遊びに来てください」は、本来の意味での招待ではないことが多く、相手に好意を持っている、相手に配慮しているということを示すものとも言えるからである。従って、この配慮に対して「ありがとう」が適当だということになるのである。

また、「ありがとう」は相手の動作を終結したものと捉えた時に出るため、相手の自分に対して向けられた動作が行われる前には出にくく、その動作の終わった後で出ることが多い。終結した動作に使われるということから、談話の終わりを示すこともある。インタビューなどの終わりに使われる「ありがとう」はこれで終了することを示す。同様にスピーチなどは「ありがとう」が終了の合図として使われる。インタビューの最後の「ありがとう」に対する「どういたしまして」などが不自然なのは、それが本当に感謝を表しているだけではないからである。

終結した動作に対するものであるため、「ありがとうございます」と「ありがとうございました」は同様に使われることが多い。「ありがとうございました」は過去の行為であることが明確な時にのみ用いられる。「先日はどうも」など、以前に会った時のことに言及する場合などに使われるわけである。

授業や講演の後で講師に「ありがとう」が適当なのは、学生の立場としては教師、講師から知識を受けるのは当然性が高いわけで、その受けた講義を終わったこととしてとらえたからである。ここでは対等な立場で使われる「お疲れさま」や上から下へという方向性を持つ「ご苦労さま」は不適當である。

### 3 「すみません」

基本的には自分が相手に何らかの迷惑をかけていることを認識していることを示す。その「迷惑」はかなり広義のもので、直接的に自分の何らかの行動が相手を困らせることになった、自分の行動がいろいろな理由から許されないものであ

り相手に迷惑をかけることになった、という重大なものから非常に軽いものまである。自分の行動が相手に迷惑をかけ、それを遺憾に感じているということを示すもので、その意味では「すみません」は「陳謝」とも言える。しかし、本当に自分が悪いことをしたという認識の場合には、別の言葉である「申し訳ない」、「ごめんなさい」等の詫げる表現を使うはずである。相手に対する迷惑が非常に軽いものである場合にも使われる。呼びかけなど相手に声をかける場合、談話の開始に使われるような場合は、自分が相手の領域を侵しているという認識を示すものであろう。

また、自分の存在そのものが相手に迷惑をかけている、自分に対して相手が配慮してくれたことを自分の過失として認識しているというもので含まれる。具体的には、相手がしなくてもいいこと（当然性が低い）ことを自分のためにくれたと感じたとき、そのような配慮をさせていることを自分側の過失のように感じるということである。この場合、相手のしていることが当然性の低い動作であるにもかかわらず、相手は自分に対する好意から行っている、自分がそのような配慮をさせていることに対して、それを認識している、それを自分側の痛みとしてとらえていることを示すことが目的である。ここにある意味では「陳謝」であり、「感謝」であるといえる場合であるが、この場合、むしろ相手の行った配慮に対して「感謝」しているのであり、その「好意」はそこで終わるのではなく、継続したものだという認識がある。それが、「すまない」ということであり、自分、相手の行為はある意味で、自分側の「借り」であって、いずれ何らかの形で相手に返さねばならないものであるということを自分が認識していることを示しているわけである。したがって、この言葉を言うタイミングとしては相手の動作が終わったかどうかはあまり重要ではなく、動作の行われる前であることもある。（自分側の過失に対して言う場合には、その行動は既に終わっていることが多い。「すみませんでした」はその意味で、「すみません」とは異なっている。「すみませんでした」はこの、「感謝」に見える用法では使われにくいだろう。）

#### 4 「ありがとう」か「すみません」か

相手の行為に対する「すみません」は一見「感謝」ともとれ、「ありがとう」との使い分けがなされているところである。例えば、ものをもらった時などは、

「すみません」と「ありがとう」が同時に出るとされる。それは、ものをもらったこと（事実、動作）に対して「ありがとう」、ものを自分にくれるという配慮をしてくれた「好意」、そのような配慮をさせたことに対して「すみません」が出るということである。ここで「ありがとう」しかなかったならば、その人が自分に何かをくれることは当然であるとみなしている（当然性が高い）ことを示しているといえる。子供が親から誕生日のプレゼントをもらった時「すみません」は出ないし、親もそれを期待しない。子供が親から誕生日のプレゼントをもらうことは当然性の高いことであると考えられる。しかし、毎年プレゼントを交換し合うような友人でない、それほど親しくない友人から誕生日プレゼントをもらったとしたら、「ありがとう」と同時に、「すみません」が出るのではないか。これが旅行のおみやげなどであれば、小さいものでも「すみません」が出るだろう。

同じ教室内での出来事でも、例えば、教師の立場として、余ったプリントを学生が返しにきたら「ありがとう」で応じるが、講習会、カルチャーセンターのような大人を対象にした場合には、大人の受講生に対しては、「すみません」が出るのではないか。

バスで席をゆずってもらったような時は、当然性の低いことをしてくれた、そのような配慮をさせたことに対して「すみません」が出る。「ありがとう」だけなら、席をゆずるのは当然だと思っていることを示すことになってしまう。従って、ここでは「すみません」が必須なのである。

相手が子供の場合は、自分に対する配慮という面は考えにくいので、「ありがとう」がよく使われる。「すみません」はお互いの配慮をよく示すものであるため、子供が使うことも少なく、これが使えるようになった時が大人の仲間入りなのかもしれない。

「ありがとう」と「すみません」は同じような状況で使われ、どちらも「感謝」とされるが、実際には相手と自分との立場、社会的役割から生まれる当然性の違いによって使い分けられている。非日本語母語話者に対する教育上の配慮から言えば、「すみません」を「陳謝」と表すのは適当ではない。「感謝」には「ありがとう」と「すみません」があり、状況によって使い分けられることを示す必要があると考える。